

特 集
ワーク・ライフ・バランス



東京大学
社会科学研究所教授

お茶の水女子大学
生活科学部教授

佐藤 博樹

御船 美智子

対談

ワーク・ライフ・バランス
社会の実現にむけて

「ワーク・ライフ・バランス」に対する
関心の高まりとその背景

佐藤 いま、「ワーク・ライフ・バランス」という言葉が社会の関心を大いに集めています。日本語では、仕事と家庭の両立（調和）や仕事と生活の両立（調和）と訳されているようですね。

私が研究している人的資源管理の分野でも、企業が、働く人が「ワーク・ライフ・バランス」を実現できるように支援することが大きな課題となってきています。

私自身は、個人の選択、たとえば子育て期に、仕事と子育てを両立したいと願っていても、社会の仕組み・慣行や会社の制度でそれが実現できない状態をなくしていくことが「ワーク・ライフ・バランス」のための取り組みではないかと思っています。女性であれば、働きたくても子育てをしながらでは働きにくいこととか、あるいは男性であれば、子育てにかかわる時間を仕事上、確保することが難しい、といった問題を解消することです。日本の場合は、まず、男女間の固定的な性別役割分業に基づいた働き方や仕事のあり方を見直す必要性を感じています。

御船 これまでは「ワーク・ライフ・バランス」というよりも「ワーク・ファミリー・コンフリクト（仕事と家庭の葛藤）」といった表現が多かったように思います。「ワーク・ファミリー・コンフリクト」は、男性は外での仕事、女性は家庭という伝統的な性別役割分業から男性は仕事、女性は仕事と家庭という新性別役割分業の考え方のもとで「仕事と家庭の両立」をすべきという規範が女性に顕著に作用したことだと思います。そこにはどこか、食べるために働かなくてはいけないし、子どもも育てなければいけないという悲壮感、ある意味で肩ひじを張っているような感じがあったかもしれません。

ですから、「ワーク・ライフ・バランス」という考え方の意義の一つは、そこに「選択」というニュアンスが含まれることですね。仕事だけをするという生き方、あるいは家庭のことだけをするという生き方は、人生において可能な体験を半分し

か経験していないといえると思いますので、「選択」しつつ、バランスを取って両方を経験できるようになるといいですね。専業主婦をしていること自体が悪いとは申しませんが、もし仕事の機会から遠ざけられているとすれば、仕事に参入できる機会を整備し、「選択」できるようにすることが望ましいと思います。

また、私は生活経済学を研究しているのですが、「ワーク・ライフ・バランス」という考え方は、「アンペイドワーク（無償労働）」と分類される家事の位置づけ、「ワーク」の意味と「ライフ」の意味を改めて考えるきっかけになっているとも考えています。

佐藤 おっしゃるように、生活の中で仕事と家庭のバランスがとれていることは大事です。しかし、かならずしも、両方を同時にやらなければいけないというわけではなく、ある時期にはどちらかを重視するというあり方でもよいと思います。その意味では、「両立」は誤解を招きやすいですね。取り組みの基本は、「選択」の可能性を広げることがポイントです。言い換えれば、唯一望ましい「ワーク・ライフ・バランス」のあり方が、存在するわけではないのです。

私は、個々人が希望する多様なライフスタイルを実現できる社会や職場のあり方を実現することが、「ワーク・ライフ・バランス」の基本と考えています。そのため、「ワーク・ライフ・バランス」の代わりに、私は「ライフスタイル・フレンドリー」の用語を使うことも多いです。

長期的な視野で職業キャリアを考えると、ある時期には、時間的に仕事に打ち込むことは、キャリア形成や能力開発にとって大事だと思います。

御船 先生がおっしゃる長期的なキャリアとも関連しますが、「ワーク・ライフ・バランス」という考え方のもう一つの意義は、今までは、主に1日という単位の中での労働・休養・余暇のバランスが考えられてきたところを、年間、さらには生涯を見通しながら現在を位置づけてバランスを考えることによって、本来あるべき生活設計——生涯設計という発想にかなり近づいたことだと思います。

おそらくこの背景には、性別を問わず、すべて